

六七歳の挑戦のあなたへ

田村明子

岩手県・六三・主婦

あなたと、京都山陰山陽と一〇日間も旅をしたのは、結婚以来初めての事でしたね。戦後五〇年の今年、一四歳の海軍志願兵だった戦友と、五十数年ぶりの再会の鳥羽の宿で、楽しそうだったあなた。生き残った者の負い目のように、軍艦旗に長い黙禱を捧げていた五人のお仲間。「貴様と俺の余運長久」の色紙が回って、あなたは「夢を」と書かれた。六七歳のあなたが、これからもどんな夢を描くのだろうと思いましたが、修学旅行に行けなかった私に、「いつか京都に連れて行く」という結婚以来の夢を叶えて、満足されていたのかしら。

旅から帰ってひと月程して「町議選挙に立つ事が決まった」とあなたから唐突に聞かされ、驚いたものの、寄せ書きの「夢を」の続きのひとつかも知れないと、妙に私自身に、納得するものがあつたのです。

ダウン症のよしえちゃんを産んだ時、お姑さんの冷たい言葉から、庇って下さった。

「お前が悪いのではない。運が悪かったのだ」と言っていたあなたが、「よしえちゃんは、福の神、我家の守り神、神様が私達を選んで下さった贈物」と言ってお下さるようになった、どんなに嬉しかったか。

あなたの優しさは、知人一人ない岩手で、生きる私の支えてした。「大学を中退して、教師にならなかつたら、政治家の夢もあつた」。ポツンと言った事がありませんね。

息子達の応援嬉しかった。あなたと共に歩いた四〇年ですもの、男のロマンとやらの、夢と一緒に、とことんお付き合いさせて下さい。

副議長に選ばれた、六七歳の新しい挑戦は、荒れた中学を一年で建て直した時の熱意で、町議会も正常に戻して下さる、と信じて、あなたを見つめ応援しています。

時には、肩の力抜いて、体に気をつけてね。決して、若くはないのですから。そしていつか又、二人の旅に連れて行って下さい。